

地球惑星科学関連学会 連絡会ニュース

No. 28

(2003年7月)

- [1] 2003年合同大会を終えて
- [2] 2004年合同大会のお知らせ
- [3] IUGG2003 第23回国際測地学・地球物理学連合総会速報
- [4] 第13回ゴールドシュミット国際会議(Goldschmidt 2003)日本開催のお知らせ(その4)
- [5] 2003年度地球惑星科学関連学会長懇談会(拡大連絡会)議事録(案)

2003年合同大会は盛況のうちに終わりました。合同大会に続き、IUGG総会も成功裡に終了しました。また、ゴールドシュミット国際会議の日本開催がいよいよ9月に迫っています。今号ではこれらの報告と、来年の合同大会の予定をあわせてお知らせします。

[1] 2003年合同大会を終えて

1. 総括

2003年合同大会実行委員長 清水 洋

幕張メッセ国際会議場で開催された2003年地球惑星科学合同大会は、2568名の参加のもと、1865件の発表があり、活発な議論がなされ、成功裡に終わりました。参加された皆様及び関連学会の方々に厚くお礼申し上げます。

2003年は、6月末からのIUGG2003年総会(札幌)、9月のゴールドシュミット国際会議(倉敷)などいくつかの地球惑星科学関連の国際会議が日本で開催され、日本の地球惑星科学の飛躍の年です。しかし、これらの国際会議への皆様の参加と代々木からの会場変更のために、合同大会での発表件数や参加者が大幅に減少するのではないかと心配をしていました。確かに、参加者及び発表件数は、過去最多を記録した2002年合同大会と比較すると8%程度減少しましたが、2001年合同大会を上回る数でした。合同大会が、地球惑星科学の学問分野において重要な位置を占めていることを示す数字だと思います。個人的には、合同大会がスタートした1990年とそれに続く1991年以来、約10年振りの合同大会運営への関与でしたので、この間の合同大会の発展には感慨深いものがあります。参加された皆様による、質の高い研究発表と活発な議論が、合同大会を発展させてきた大きな要因だと思います。

1990年及び1991年の参加者と発表件数を、古いメモから探し

出しました。90年は約1200名・766件、91年は約1400名・781件でした。今回の参加者数・発表件数と比べた時に、合同大会運営を担当されてきた方々の献身的な御努力が、本大会を支えてきたことを痛感致します。2001年からの運営機構方式により、継続的な合同大会運営を目指してきました。そして幕張メッセ国際会議場での開催により、今後も安定した会場確保が可能となりました。また、今回から連絡会会長が合同大会委員長を兼ねることになりました。この体制のもとでの、各学会・参加者・運営担当者の相互の率直な意見交換が、さらに実りある合同大会を実現させていくものと信じております。

合同大会が皆様の研究及び地球惑星科学の発展の場となりますよう、引き続き積極的な御参加をお願いし、お礼の挨拶とさせていただきます。

[大会概要]

会期：2003年5月26日(月)-29日(木)

会場：千葉幕張メッセ 国際会議場

- 共催・協賛学会数 19 学会
- 後援団体 32 団体
- 参加者数 2568 名
 - 事前参加登録者数 1929 名
 - (一般 1140 名、学生 555 名、一日券 234 名)
 - 当日参加登録者数 520 名(一般/学生 235 名、一日券 285 名)
 - 見学学部生 95 名、シニア(70 歳以上)24 名
- 論文投稿数 1865 件
- セッション数 83 件(ユニオン:1、レギュラー:57、スペシャル:24、特別公開:1)
- 会場数 12
- アルバイト延べ 154 名 地元ボランティア 延べ 28 名
- 団体展示 19 団体(21 ブース)
- 書籍・出版団体展示 14 団体(16 ブース)

(株)朝倉書店	インフォトレーダー(株)
エルゼビア・ジャパン(株)	海洋出版(株)
鹿島出版会	共立出版(株)
古今書院	(株)新日本ファミリークラブ
(株)テラハウス	テラパブ
(財)東京大学出版会	日本地質学会
(株)渡辺教具製作所	
ユニテッド・パブリッシャーズ・サービス社	
- 会合 53 会合
- 取材プレス数 20 社

2. 企画局報告

2003年担当責任者 大村 善治

昨年に引き続き今年も、「団体展示」の企画・広報、関連団体へ合同大会「後援」を依頼、及びプログラム局と連携してユニオンセッションの企画・開催のサポートを行った。さらに従来的一般公開の「青少年向けセミナー」に代えて、「特別公開セッション」として地学教育問

題を取り上げて、一般、特に小中高の先生方の参加を呼びかけ、合同大会を盛り上げるべく諸活動を行った。

●後援

2年目を迎える企画で、大会の裾野を広げ、より充実し確固たる大会への発展を目的としている。「後援」依頼の内容は、①経済的負担は求めない。②後援者としてポスター・プログラム・ホームページに団体名の記載。③(可能な限りで)団体展示への出展依頼、の3点である。地球惑星科学関連の機関への依頼の他に、2003年大会では地学教育について特別公開セッションを開催するために、教育関係者の参加をより多く得られるよう、文部科学省へも後援の依頼をした。結果、32団体より快諾を得ることができた。これは昨年より12多く、合同大会が関連団体へ広く受け入れられたと判断できる。

[主なスケジュール]

- 02/09月 依頼先リスト作成、依頼書項作成、
- 10月 募集・勧誘開始、案内DM発送
- 11-12月 後援団体決定
- 03/01月 ホームページにて後援団体公開
(以降順次、ポスター・大会プログラム等へ掲載)

[後援団体一覧]

文部科学省、日本学術会議、
国土交通省海上保安庁海洋情報部、 国土交通省気象研究所、
国土交通省気象庁地磁気観測所、 国土交通省国土地理院、
文部科学省宇宙科学研究所、 文部科学省統計数理研究所、
文部科学省高エネルギー加速器研究機構、
文部科学省国立極地研究所、 文部科学省国立天文台、
北海道立地質研究所、
(独)建築研究所、 (独)航空宇宙技術研究所、
(独)国立科学博物館、 (独)国立環境研究所、
(独)産業技術総合研究所地質調査総合センター、
(独)土木研究所、 (独)農業工学研究所、
(独)物質・材料研究機構、 (独)防災科学技術研究所、
宇宙開発事業団、 海洋科学技術センター、 金属鉱業事業団、
核燃料サイクル開発機構東濃地科学センター、
固体地球統合フロンティア研究システム、
(財)宇宙環境利用推進センター、 (財)深田地質研究所
(財)資源・環境観測解析センター、
(財)地震予知総合研究振興会、
(財)地球科学技術総合推進機構、
(社)全国地質調査業協会連合会

●団体展示

大会開催中、全期間を通じて利用できる展示ブースで、この研究分野にまつわる包括的情報発信の場を目指している。出展数は19団体21ブースであった。前回まで、会場の関係でブースに人が流れずに、出展者の不満があったが、今大会では、会場のメイン2Fの中央ロビーで開催できたため、多くの人を集めることができ盛況であった。

[主なスケジュール]

- 02/10月 会場決定、募集要項作成、募集対象絞込み開始
- 11月 募集・勧誘開始、案内DM発送
- 03/01月 応募一次締切、調整、追加募集
- 02-03月 最終締切、出展者決定、出展要綱配布
- 03-05月 会場準備手配(総務局)へ

[出展者一覧]

アーキアンパーク計画 応用地震計測(株)
海洋科学技術センター固体地球統合フロンティア研究システム
海洋科学技術センター地球深部探査センター
(株)IH エアロスペース (株)勝島製作所
(株)近計システム (株)地球科学総合研究所
(株)レッチェ (財)地球科学技術総合推進機構
東京大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
東北大学大学院理学研究科地学専攻
(独)産業技術総合研究所地質調査総合センター
(独)通信総合研究所 (独)防災科学技術研究所
白山工業(株) 文部科学省宇宙科学研究所
文部科学省国立天文台 ALMA計画 (有)オプティマ

●特別公開セッション

『地学教育の昨日・今日・明日

—地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか?—』

5月26日(月)9:00-15:15 (以下講演順)

- ・「地学教育に対する私見」 木村龍治(前東京大学海洋研究所)
- ・「地学選択者数の減少と魅力的な教科書」
 有山智雄(開成中・高等学校)
- ・「小学校理科教育におけるインターネット活用と体験的な学習のあり方—子どもたちの印象に残る授業づくりを目指して—」
 手代木英明(新宿区立余丁町小学校)
- ・「中学生の地学に対するイメージ」
 関谷育雄(横浜国立大学附属鎌倉中学校)
- ・「高等学校における地学教育の現状と未来」
 坪田幸政(慶応高等学校)
- ・「アメリカの地球惑星科学/地球環境科学の研究戦略と初中等教育戦略—top down と bottom up の相互作用」
 木村学(東京大学大学院理学系研究科)
- ・「21世紀の地学教育について: 大学研究者の立場から」
 淡路敏之(京都大学大学院理学研究科)
- ・「21世紀の理科教育と地学」

西田篤弘(宇宙科学研究所名誉教授)

例年の「青少年向け」セミナーに代えての公開企画である。子供たちの「理科離れ」に対し、文部科学省においても、各種対策が行われ始めているが、特に高等学校での地学履修者の減少は、憂えるべき現状である。この状況の中、「地学はその学問分野が多岐にわたるため、関係者間の情報交換が不足している」という多くの声が聞かれる。本セッションは、「教育者と研究者が一堂に会して、地学教育の現状について共通理解を深め、21世紀に求められる地学教育の在り方を議論する機会の提供」を目的としている。

参加者は約250名で、ほぼ1日かけての長時間のセッションにも

かかわらず、多くの参加者を得ることができた。研究者だけでなく、小中高の教育現場の先生、教育機関担当者、文部科学省担当者、教材業者の方々などが、講演に熱心に耳を傾け討論できたことは、大変意義があったと思われる。主な意見として「地学離れは大学受験制度に問題がある」、「きちんと指導できる教員が少ない」、「教科書が不十分」、「理科の科目自体の見直しが必要ではないか」等が出されたが、この教育問題は継続課題となり「地学教育」委員会も立ち上げることになった。尚、この公開セッションの様子は同日夕刻の千葉テレビのニュースで放映され、上記の主な意見が報道された。

開催にあたり配慮した点は、小中高校の学校教員の方が参加しやすいよう、①事前に希望者へ出張依頼書を発行、②文部科学省や教育委員会の後援を受ける、③レギュラーセッション「地学教育」同日開催などであった。しかし、現場を抱える教員の方にとっては、平日の参加は負担であり、地学教育を扱う場合は日曜開催も検討する必要性を感じた。

また、以前より要望のあった公開企画の講演資料については、今回初めて特別に予算をとった。コンピーナや、寄稿者には多大な労力負担があったが、90 頁の立派な冊子が完成した。この冊子は公開セッション会場だけでなく、受付などに置き、自由に持ち帰ってもらった。1000 以上配布できたので、大会参加者の約半数がこの冊子を持ち帰った計算になる。本セッションの目的でもある「地学教育の現状」の共通理解を深めるための、広報媒体として一役を買ったと思われる。

●広報活動

- ① ポスター作成・配布：今回は、ポスターを製作するにあたり、デザインの公募を行なった。初めての試みであったが 15 点あまりの力作が集まった。運営機構コアメンバーにより優秀作を選定し、A2 サイズ 300 部、A3 サイズ 100 部作成した。配布先リストの見直しをし、関連専攻のある大学・研究機関(125)、都道府県(主要都市含む)教育委員会 (58)、都道府県私学中学高等学校協会 (47)、地学関係教員養成課程のある大学(53)、スーパーサイエンス校や近隣高校(48)、マスコミ(20)等へ郵送し、大会及び特別公開セッションへの参加を呼びかけた。
- ② マスコミ広告：読売、産経の各新聞で「特別公開セッション」の広告が掲載された。この他、開催地千葉県における広報活動の協力(JR 駅配布タウン紙への掲載 4 月・5 月、千葉 TV、ラジオ放送)があった。
- ③ 当日の取材記者への対応：基本的に前大会通りで、「取材方法指示書」を準備して、1F 受付カウンターで記名、名札着用の上入場してもらった。来場は 20 社程度であった。特別公開セッションの TV 取材等の対応は企画局が行った。又、大会初日の夕刻に、東北地方に大きな地震が発生したため、コメントを求めてマスコミの問合せが集中した。一部断つても、夜遅くまで会場に居残る新聞社がいたというハプニングがあったが、その他大きなトラブルはなかった。

●今後の課題

- ・ 団体展示ブースは、概ね出展者にも好評で満足してもらえた。内容的にも経済的にも確固とした大会にするために、もっと盛り上げたい。大学関係機関の参加が少ないように思われる。
- ・ 特別公開セッションの開催をきっかけに「地学教育」委員会が発足した。メーリングリストを立上げて既に情報交換が行なわれている。連絡会の下部組織であるが、意義ある委員会になるよう、運営機構でもサポートをしていく必要がある。
- ・ 広報については、繁忙な時期が他局と重なり、人手不足のため十分な活動がなかなかできない。宣伝したい内容によって、広報先、活動時期・方法などを再検討し、効果的な活動を展開したい。また、広報活動する中で、大会の略称、ロゴマーク、バナーなどの必要性を感じた。

3. プログラム局報告

2003 年プログラム委員長 原 辰彦

2003 年大会はセッション数 83 (特別公開セッションを含む。1 コマ 1 時間半のコマ数にして 171)、総投稿数 1865 (オーラル 1071、ポスター 794) で、2002 年大会と比べると若干減ったものの、過去数年並みの規模でした。約 1 ヶ月後に IUGG が開催されたことを考えると、盛況であったと思います。セッションコンピーナー、プログラム委員、そして大会に参加された皆様のご協力に厚くお礼を申し上げます。

2003 年大会は過去 2 年の大会を踏襲し、セッション区分としてレギュラー、スペシャル、ユニオンの 3 つを設けました。ユニオンセッションは今回は公募のみとし、「計算が開く地球科学の明日」を採択・開催致しました。

レギュラー化を希望されたセッションについては、過去の実績に基づいてプログラム委員会で検討・決定致しました。レギュラーセッションには(単、複数)学会提案のほか、研究グループ提案のものも増え、その提案母体が多くなりになってきましたので、この点を整理し、プログラム委員会で情報を共有するように致しました。

投稿システムにつきましては、締切間際にアクセスが集中し、システムが反応しなくなる事態が起きまして、皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。投稿システムにつきましては、情報局と協力し、改善を図りたいと考えております。

プログラム編成につきましては、2002 年大会の方式を踏襲する方針でしたが、会場が国立オリンピック記念青少年総合センターから幕張メッセ国際会議場に変更になり、いくつかの点を変更しました。

大会期間が 5 日から 4 日になり平行セッション数は 12 に限られていることから最大限可能なオーラル講演数が 2002 年大会よりも減りました。そのためにオーラル発表を希望された方すべてのご要望にお応えすることができませんでした。この点につきましてセッションコンピーナー及び投稿者の皆様のご理解・ご協力に感謝致します。

また、2002 年大会ではポスターの掲示時間を昼から翌日の昼とし、最終日にコアタイムを設けませんでした。今回は掲示時間を朝か

ら夕方コアタイムまでとし、4日すべてにコアタイムを設けました。最終日の発表者の方々にとって不利益にならないように、セッション数は4日間で均等になるように工夫致しましたが、東京近郊以外の参加者の方にはご不便をおかけしました。この点につきましても、参加者の皆様のご理解に感謝致します。

2004年大会の大会期間は現時点でまだ確定しておりませんが、今回の経験を基にして、他局と協力し、よりよい大会の実現を図りたいと考えております。今後も皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

4. 情報局報告

2003年担当責任者 竹内 希

現行のJCOM社製のWeb運営システムが導入されて5年目の合同大会となりました。参加者2500人以上を誇る合同大会運営を、わずかな人数のスタッフで何とか運営できている現実を考えれば、電子化システムの導入は成功であったと言えると思います。しかしまだ不具合対策が完全ではなく、ユーザーから苦情が寄せられ、事務局がその対応に追われてしまうのも残念ながら実状でした。不具合解消に時間がかかる原因は、過去の失敗を活かしシステム改善につなげるプロセスに、さらなる改善の余地があるからと考えられます。本年度の情報局はこのスキームを作ることを重要課題として位置づけました。

昨年度までの不具合対処は、根本的な原因究明がないまま対処療法で終わらせることがありました。例えばユーザーから予稿集原稿の入力ページが正しく表示できないといった苦情が来ても、Java Script のどの関数が不具合の原因になっているか等の検証を行えないまま、ユーザーにブラウザのバージョンを上げることをお願いするといった類の対処で終わってしまうことがありました。この方法では真の省力化を実現するシステムの完成に時間を要してしまいます。

そこで本年度は、JCOM側にシステムの動作保証条件をまず提示してもらい、動作保証条件を満たしながら発生した不具合に対しては、その原因究明と根本的な対処を行い、情報局に報告してもらうようにしました。予稿集投稿締切の前日まではシステム不具合に起因する苦情はあまりなかったのですが、締切日にシステムダウンを起こしてしまい、皆様には多大なご迷惑をおかけしました。実メモリ不足に起因する応答の劣化が原因であり、来年度以降はシステムのパワーアップにより問題解決をはかるとの説明を受けております。しかしメモリ不足が万が一ソフトのバグに起因するものであれば、来年度以降も再発する可能性がないわけではありません。再び皆様にご迷惑をかけることがないよう、来年度の情報局長にこの点の確認をお願いするつもりです。

最後に、他局とともに、事務局の方々には大変お世話になりました。改めてお礼を申し上げます。

5. 財務局報告

2003年担当責任者 中村 正人

2003年度合同大会は会場を幕張メッセに移したため、2002年大会と比べて、会場費で400万円、音響、映像設備費で300万円の支出増加となった。これを補うため、展示ブースの拡大による収入増を計画し、また事前割引率の縮小、アルバイト代の値下げ、事務局経費の削減を行った。

一月遅れでIUGGが開催され、そちらへの参加による合同大会への参加者数の減少が懸念されたが、実際にはほぼ同数の参加者が得られた。最終的に6月30日の会計は収入32,019,782円、支出32,470,356円となり450,574円の赤字となった。この赤字により繰り越されてきた金額は前年度の15,232,201円から14,781,627円となるが、合同大会の運営に支障をきたすものではない。

2004年度は大会期間を5日間に延長するためさらに多くの会場費、設備費が必要となる。これを補うためにはより多くの研究者、学生の参加が望まれる。各主催学会に置かれてもより一層の合同大会への参加を奨励していただきたい。

<収入>

2002 繰越金	15,232,201
投稿料	4,364,000
参加料	
(事前)1916件(一般:1369、学生:547)	16,869,000
(当日)520件(一般:417、学生:103)	4,530,000
差額返金	30,000
手数料	33,000
CD-ROM 販売	163,000
団体展示	4,550,000
出版展示	480,000
諸学会会場費	797,500
学会受付費	40,000
学会長懇談会費	110,000
雑収入	53,010
利息	272
<収入計>	¥47,251,983

<支出>

大会当日費用	
幕張メッセ国際会議場 会場使用料	7,548,912
音響設備費	50,400
映像設備費	2,129,253

ポスター・団体展示会場設営費	1,666,350
団体展示会場電気設備工事費	220,500
アルバイト代金・事務局日当	2,566,618
大会中滞在費	238,250
講師謝金(交通費)	39,120
保育室援助	65,040
大会雑費(コピー代)	42,000

JCOM 関連

受付人件費、用具	320,000
登録処理経費	1,461,300
運営管理費	1,550,000
ホームページ製作費用 (プログラム開発、WEB 開発、システム運用管理)	2,700,000
消費税	468,568
値引き	-625,118

印刷費・郵送費

プログラム印刷費(570×2500)	1,425,000
CD-ROM 製作費(620×2500)	1,550,000
封筒印刷費 [請求書、プログラム発送用等]	162,500
郵便振込用紙(25×2200)	55,000
ネームカード(65×2270)	147,550
請求書・プログラム・CD-ROM 郵送費	585,200
クリアファイル制作費	292,500
冊子代	365,400
ポスター製作費	213,000

運営機構経費

事務局員給与	5,393,733
事務局員交通費	377,510
事務局員国民保険その他	345,900
他局交通費	186,720
通信費(振込手数料、電話代、郵便代)	403,368
事務消耗品費	190,505
備品代	109,004
その他雑費	6,918
連絡会経費	97,355

学会長お弁当代	37,500
返金	84,500
支出小計	¥32,470,356
繰越金額	¥14,781,627
<支出計>	¥47,251,983
収支	¥-450,574

6. 総務局報告

2003 年担当責任者 岩上 直幹

会場を代々木青少年センターから幕張メッセに移した結果、会期前・会期中のいずれについても、総務局の作業は大幅に減った。また、これまで悩まされてきた代々木会場特有の規制から開放され、自然な運営が可能となった。

これまでの会期前の作業としてはポスターボード・ブース材・AV 機材の手配、電源工事、食堂業者との折衝などがあつたが、今回はいずれも現場部分にはメッセがあつたため、総務局は指示をただで済むこととなった。また、これまでの会期中は代々木会場特有の AV システム(PC が正常動作しない何ともできない)に起因するトラブル対策に忙殺されたが、今回は PC を介さない単純システムとなったため、アルバイトの訓練も不要となり、AV 関係のトラブルはほとんど起きなかった。大きな会場が使えたため、「狭い」と悪評の高かったポスターも、間隔をこれまでの最低レベル 2.5m から余裕レベル 3.5m に改善できた。また多くの手間を要してきた宿泊関係、特にユースホステルタイプの扱いから開放されたことも大きかった。

小トラブルとしては温調・換気の不十分さがしばしば指摘された。代々木会場にはなかったシアター形式の椅子配置そのものに苦情は少なかったが、部屋によっては入り口付近に人が詰まり奥が空いている状態が起きた。次回には、椅子配置の工夫など対策が必要。

代々木会場に比べると部屋数が少なく、全体容量にやや不安がないでもないが、土日も使え、何年先でも専有予約可能なことなど安定要因は多く、しばらくは今年の形を踏襲することが可能であろう。

[2] 2004 年合同大会のお知らせ

1. 概要

- 会期: 2004 年 5 月 9 日(日) - 13 日(木) 予定
- 会場: 幕張メッセ国際会議場
- 費用: 投稿料、参加費、
基本的に 2003 年大会に準ずる。見学学部生、70 歳以上無料。
- 各種登録開始・締切日(予定)

講演投稿	開始: 2004 年 1 月 5 日(月)
	締切: 2004 年 2 月 6 日(金)
事前参加登録	開始: 2004 年 1 月 5 日(月)
	締切: 2004 年 3 月 12 日(金)

2. 「セッション提案」のお知らせ

2004 年大会プログラム委員長 吉田 尚弘

2004 年大会プログラム委員長の吉田尚弘(東工大)です。どうぞよろしくお願ひ致します。2001 年からの過去 3 回の大会でセッション区分やプログラム編成スケジュールはほぼ固まり、昨年からは運営に適切な会場を得ております。2004 年大会は基本的にこれを踏襲し、皆様の活発なご議論、ご提案をいただくことで、より充実した合同大会実現に向けて対応していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

【1】プログラム委員会の構成と役割

プログラム委員会についてご説明致します。

- (1) プログラム委員会は、各共催学会選出の委員と運営機構プログラム局員から構成されます。
- (2) プログラム委員会は、提案されたセッションの採択、プログラム日程案の作成を行います(具体的なスケジュールは後述)。
- (3) プログラム委員会は、(2)の作業を行います。最終的な全体調整はプログラム局幹事会(後述)が中立的な立場から責任を持って行います。

運営機構プログラム局員と学会選出プログラム委員は兼任可能ですが、プログラム局幹事会は中立的な立場を保つため、兼任不可です。プログラム委員、プログラム局員のリストは<http://www.epsujp/>でご覧になれます。

プログラム局幹事会は 2004 年プログラム委員長に前年度、次年度のプログラム委員長と、分野のバランスを考えて数名の幹事を加えて、構成します。今年の構成メンバーは、原辰彦(建築研、2003 年大会担当)、吉田尚弘(東工大・フロンティア、2004 年大会担当)、篠原育(宇宙研、2005 年大会担当)、北和之(茨城大・理)、小野高幸(東北大・理)、岩森光(東大・理)です。プログラム編成に関する検討事項はプログラム局幹事会で案を立て、プログラム委員会で検討致します。

【2】2004 年大会のセッション区分(案)

2004 年大会は前回までの大会を踏襲し、R(レギュラー)、S(スペシャル)、U(ユニオン)の 3 区分を設けて、プログラム編成を行うことを考えております。

Rセッション

5 年間程度セッション名を固定するレギュラーセッションです。2001 年大会で各学会から提案していただいたセッションの他に、レギュラー化を希望され、過去の実績からレギュラー化が適当であるとプログラム委員会が判断したセッションがあります。レギュラー化を希望されるセッションについては、2004 年大会でも過去の実績を基にプログラム委員会で検討させていただきます。また、新規参加の学会に対しては、レギュラーセッションをご提案頂く、もしくは合同大会への参加実績を重ねた上でレギュラー化をご検討いただくなどの対応を考えております。

Sセッション

旬の研究テーマを学会横断的に議論するセッションとして、これまで同様一般から公募します。

Uセッション

全学会に関係する話題を取り上げるセッションです。2002、2003 年大会では、運営機構提案セッションと公募などで、3 セッション、1 セッションをそれぞれ 1 日行いました。2004 年大会も同様な方針を考えておりますので、皆様の積極的な応募をお待ちしております。

【3】2004 年大会プログラム編成スケジュール(案)

2004 年大会のプログラム編成日程案を以下に示します。

8 月初旬	プログラム委員会再編開始 Rセッション決定 (レギュラー化を希望されたセッションの検討を含む)
9 月初旬～	Uセッション公募開始
9 月初旬～	Sセッション公募開始
10 月中旬	Uセッション採択
10 月末	Sセッション公募締切
11 月中旬	Sセッション採択
1 月 5 日	投稿受付開始
1 月 26 日	早期締切
2 月 6 日	投稿締切
2 月 7 日～	セッション日程、プログラム編成
3 月 1 日	投稿者へ日程時間割通知
3 月 1 日～	プログラム最終調整
3 月 5 日	プログラム編成終了
5 月 9～13 日	2004 年大会

2004 年大会の開催期間は前回大会と比べて 2 週間以上早いので、プログラム編成終了を含むほとんどの日程を 2 週間程度早くしてあります。投稿期間が、年始から開始すること、編成・通知・印刷・送付日程などから、例年より短期間になることにご注意いただき、早めの投稿をお心掛けください。また、大会開催期間を 5 日間と延長する方向で検討しております。

上記のセッション区分案、プログラム編成スケジュール案などはプログラム委員会で検討し、決定していく予定です。その結果につきましては、プログラム委員および運営機構のウェブサイトを通して、皆様にお知らせいたします。来年の大会に向けて、どうぞよろしくお願ひ致します。

【3】IUGG2003 第23回国際測地学・地球物理学連合総会速報

組織委員会総務幹事 末廣 潔

2003年7月11日、アジアで初開催の札幌で6月30日以来2週間にわたったIUGG総会が、幕を閉じ、次回は2007年イタリアのペルージャで再会ということになりました。無事、閉幕を迎えられたこと

は、主催の日本学会会議、地球物理学関連の16学会をはじめ、札幌市、北海道、出展団体、地元ボランティアほか、多数の力が合わさったおかげであり、努力を惜しまなかった方々に深く感謝します。詳しい報告書は別途まとめられますが、ここに速報として、総会の概要をお知らせします。数字については、あくまで確定版ではないことに留意してください。

事前登録のしめきりまでに、4,169名の登録者があり、うち、海外が2,318名でした。実際に総会に参加された方は、約4,150名となりました。会場は IUGG にふさわしく国際的な雰囲気につつまれ、約75ヶ国の参加国数を反映していました。札幌の街にも外国人の姿が目立ったようです。全登録者数は、当初の目標を上回ることができました。ただ、SARS による影響により近隣アジアからの参加が減ったのは、まことに残念なことでした。会期中7月5日には感染地域指定がすべて解除にはなりませんが、これがあと一月早ければと悔やまれます。

札幌ロイトン、厚生年金会館、教育文化会館の3会場で毎日約30のセッションが開かれました。ポスターセッションは晴れた日には屋根が開くという斬新な会場スピカで300以上のスペースを設けました。オーラルセッションが多いという総会の特徴とポスターセッションの充実については課題も残されましたが、余裕あるスペースが確保でき、議論が活発な時間帯も短いながらもありました。

今回の総会には、100人を超える日本人コンビーナーの活躍がありました。総会のテーマである「この惑星(ほし)の今:未来への挑戦」による連合セッションは好評で、IUGG が7つの協会を包む傘の役割だけでなく、有機的結合をする軸の役もみごとに演じたと思います。IUGG のユニークな、かつグローバルな役割の重要性が浮き彫りにされました。また、最終日には、若手研究者の連合セッション「IUGG 科学:その未来」が活況を呈し、各協会の代表選手に日本から2人も選ばれていたことは頼もしく思われました。実際、彼らの提案には耳を傾けるべき内容が多く、公開されているのでぜひご覧下さい(<http://www.iugg.org/reports.html>)。だいじなことは彼らの発表を通して、地球科学の未来を垣間見ることができたことでしょう。

7月2日オープン直後の札幌コンベンションセンターで開催された歓迎式典には、天皇后両陛下ご参列のもと、陛下のお言葉、文部科学省政務官挨拶に、首相メッセージがありました。とくに陛下のお言葉(<http://www.kunaicho.go.jp/>)には、聞き入る方々(英仏訳つき)から、賞賛の感想をいただきました。あえて付け加えますと、災害や人命に対するまさに陛下ご自身の思いが込められていた内容です。アトラクションとして北海道大学オーケストラも名演奏を披露してくれました。

展示会場の研究発信ブースにも注目が集まりました。何人もの外国からの参加者から、展示の内容に目を見張ったとの感想を受けました。目的を達することができたのではないかと思う次第です。

今回の総会では、アウトリーチにも力が注がれ、IUGG 参加者の協力により、北海道各地で「出前授業」、市民大学、中学生サミット、ジ

ュニアポスターセッションなど行われ、たいへんな好評をいただきました。地元の新聞では、IUGG という単語が、ふつうに使われるほど親しみを持ってもらえたようです。

今回の総会をもって、河野 IUGG 会長からシャミール新会長(イスラエル)にバトンタッチされました。河野会長の並々ならぬ精力的活動活躍も、総会の成功の重要な要素でした。これを機会に、IUGG の意義を科学先進国としての日本がさらに世界に敷衍することが進められればと個人的に思う次第です。

この総会では、参加者の健康状態を一人残らず管理することになりましたが、みなさまのご協力で問題の発生なく11日間の会期を終了できました。参加して下さったみなさま、支援して下さった方々に深く感謝します。7年間の準備期間から2週間の会期まで思い起こしますと、長くもありましたが、終了した今、日本の地球科学の財産として重大な歴史的基盤が残せたのではないのでしょうか。組織委員会は、しばらく活動を続けますが、今年度中に開催する第3回組織委員会をもって停止することになります。部会長の方々ごろうさま。

[4] 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ(その4)

——プログラムの発行——

第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会委員長
松久幸敬

会議名: 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003)

Website: <http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>

E-mail:

開催時期: 2003年9月7日(日)~12日(金)

開催場所: くらしき作陽大学(倉敷市)

主催: The Geochemical Society (国際地球化学会)

The European Association of Geochemistry

(欧州地球化学連合)

The Mineralogical Society of America (米国鉱物学会)

日本地球化学会 (The Geochemical Society of Japan)

後援: (独立行政法人)産業技術総合研究所、(学校法人)くらしき作陽大学、倉敷市、岡山県

学協会後援: 20学協会(名称略)

会議の規模: 参加者約1,200名、発表論文数約1,150件(口頭およびポスター)、特別講演、企業展示、バンケット、エクスカージョン

ゴールドシュミット国際会議は、General Symposia 9領域と Special Symposia 53テーマから構成されます。論文発表は、1,150件の申し込みがあり、すでにプログラム編成が終わっています。以下に会議日程の概要を示しますが、論文発表プログラムおよび会議の詳細は、会議ホームページ(<http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>)をご覧ください

ださい。早期割引登録はすでに終了していますが、当日現地での登録も可能です(主催学会の会員割引料金一般 38,000 円、学生 18,000 円)。

9月	午前	午後	晩
7日(日)		登録開始(16時)	アイスブレイカー
8日(月)	一般講演/ポスター	同左	ウエルカムレセプション
9日(火)	一般講演/ポスター	同左	
10日(水)	全体会議・特別講演	オブショナルツアー	
11日(木)	一般講演/ポスター	同左	バンケット
12日(金)	一般講演/ポスター	同左	

9月10日(水)午前の全体会議では、授賞式のほか、以下の特別講演が予定されています。

Gast Lecture	H. Ohmoto:
	Chemical and biological evolution of the early Earth: A minority report
GSJ Award Lecture	I. Kaneoka:
	Terrestrial noble gases - A unique indicator for the chemical structure and evolution of the Earth
Goldschmidt Lecture	B. J. Wood:
	The principles controlling trace element partitioning in igneous processes

ゴールドシュミット国際会議では、以下のテーマと日程で、若手研究者と学生を対象にしたショート・コースを開催します。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

13th V. M. Goldschmidt Conference Short Course on ICP-Mass Spectrometry

<http://www.geo.titech.ac.jp/epss/ss2003/index.htm>

期間: 2003年9月6日(土)12:30 ~ 7日(日)15:00

場所: 岡山テルサ(JR山陽線中駅駅から徒歩5分)

講師: G. Detlef (ETH, Switzerland), A. Halliday (ETH, Switzerland), T. Fujii (Tokyo U), S. E. Jackson (GEMOC, Australia), K. O' Nions (Oxford U, UK)

ゴールドシュミット国際会議の開催を前に、倉敷市において、以下の二つの中・高校生、一般市民向け公開講演会が開催されます。いずれも入場無料。

(1) ゴールドシュミット国際会議記念倉敷市民講演会「地球と生命のふしぎ」

日時: 2003年8月24日(日) 13:00~16:30

場所: ライフパーク倉敷 大ホール(JR山陽線倉敷駅から徒歩25分)

内容: 酒井 均 「火星にも生き物は生まれたか?—温泉大好きバクテリアは語る—」

風早康平 「火山噴火: その恵みと災害」

野尻幸宏 「地球温暖化、これってこまるの? どうしよう?」

(2) 地球化学市民講座「世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の未来」

日時: 2003年9月7日(日) 10:30~12:30

場所: くらしき作陽大学1号館(JR山陽新幹線新倉敷駅下車徒歩10分)

内容: 紀本岳志 「瀬戸内海をはかる一観測データが語る豊かな海の未来—」

田上英一郎 「海の物質循環を動かす小さな生き物たち」

(連絡先)

第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会事務局

〒305-8567 つくば市東1-1-1 中央第7

産業技術総合研究所 地球科学情報研究部門 富樫茂子 気付

Tel: 0298-61-3940, Fax: 0298-61-3748, E-mail:

[5] 2003年度地球惑星科学関連学会長懇談会(拡大連絡会)議事録(案)

日時: 2003年5月29日(木)17:00~18:30

場所: 幕張メッセ 国際会議場 2F 201A室

出席者:

青木 元(日本地震学会)、荒井章司(日本岩石鉱物鉱床学会)、安藤寿男(運営機構)、飯石一明(日本鉱物学会)、今井 亮(資源地質学会)、大村善治(運営機構)、鍵 裕之(日本地球化学会)、掛川 武(日本岩石鉱物鉱床学会)、倉本 圭(日本惑星科学会)、近藤昭彦(水文・水資源学会)、近藤 忠(日本岩石鉱物鉱床学会)、鷲谷 威(日本地震学会)、鹿園直建(資源地質学会)、清水 洋(日本地球化学会)、末永 弘(日本応用地質学会)、杉田倫明(日本水文学会)、関 陽児(資源地質学会)、高橋幸弘(地球電磁気・地球惑星圏学会)、竹内 希(運営機構)、竹本修三(日本測地学会)、津田敏隆(日本気象学会)、坪井誠司(運営機構)、中井 仁(特別公開セッションコンビナー)、中川弘之(日本測地学会)、中田節也(日本火山学会)、中村 正人(運営機構)、根本泰雄(特別公開セッションコンビナー)、野津憲治(日本地球化学会)、浜野洋三(運営機構)、原 辰彦(運営機構)、平原和朗(日本地震学会)、藤井良一(地球電磁気・地球惑星圏学会)、松本 剛(日本地震学会・日本測地学会)、丸井敦尚(日本地下水学会)、南島正重(日本地学教育学会)、諸井孝文(日本地震学会)、山野 誠(日本地震学会)、坂本尚義(日本鉱物学会) 以上38名

配付資料:

1. 議事次第
2. 2002年度地球惑星関連学会連絡会議事録

3. 地球惑星関連学会 2003 年合同大会の概要
4. 地球惑星科学合同大会運営機構組織メンバー
5. 地球惑星科学関連学会連絡会、「地学教育」委員会の設立について
6. Goldschmidt2003 報告
7. 1990 年からの合同学会、連絡会の情報(開催場所、日程、参加学会、役員)

議事

1. 前回議事録確認(清水・連絡会会長)

2. 合同大会報告

(1) 2003 年大会報告(濱野・運営機構代表)

共催・協賛学会19学会、後援32団体のもとで、セッション数85件(昨年は87件)で開催した。参加登録者数は約2600名、論文投稿数は1873件で、各々昨年との比較では約1割減であるが、盛会であったことが報告された。昨年度までは会場の関係で青少年セミナーを開催していたが、今年度はそれにかわって特別公開セッション「地学教育の昨日・今日・明日ー地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか?ー(略称:地学教育の展望)」を開催し、250名ほどの参加者があり、活発な討論がなされた。

今回の大会及び会場に関して好意的な感想の他に、本年度の大会に関して以下のような具体的な意見もあった。

- ① 会期が4日間になったこと、昼休みが1時間半となっていること、会議用に適した小部屋がないことなどから、会議とセッションとの切り替え時間が十分とれなかったケースが見受けられた。[運営機構からの回答:夜の時間に制限がないので、会議を夕方を設定することもできる。]
- ② ポスターのスペースがやや手狭であるという印象があった。OHPの苦情などはなかった。
- ③ 会期が減ったため、オーラル発表の件数が減った。オーラルもポスターも5日間予定するのが望ましい。

(2) 2003 年大会の会計報告(中村・運営機構財務局担当責任者)

収支は現在のところ、若干の黒字となる見込みである。次回、会期を一日延ばす場合は200万円費用が余計にかかるので議論が必要である。

3. 2004 年大会予定(濱野・運営機構代表)

場所: 幕張メッセ国際会議場。

日程: 2004年5月10日(月)から13日(木)または14日(金)まで。

4. Goldschmidt2003 国際会議報告(野津・日本地球化学会会長)

1150 件の投稿があった。(うち国内 520 件、国外 630 件。)ホスト学会は日本地球化学会であるが、学会員以外からの投稿も多い。

5. 地学教育関連について(中井、根本、南島)

(1) 本大会の初日に特別公開セッション「地学教育の昨日・今日・明日ー地球惑星科学は理科・地学離れを救えるか?ー」を開き、盛況であった。

(2) 「地学教育」委員会を地球惑星科学関連学会連絡会の下部組織として設置することが提案された。下記の説明(①から⑤)及び質疑(⑥)の後、本委員会の設置が承認された。各学会から委員を推薦する。

- ① 委員会は合同学会の共催・協賛学会より推薦された者(1名以上)によって構成され、地学分野および学校科目「地学」の教授内容、学習指導要領および教育課程、入試制度、その他地学教育に関する諸制度のあり方を検討する。
 - ② 当面は学校科目「地学」関連学会連絡協議会と共同して活動していく。
 - ③ 地学教育の教育という用語は学校教育の意味と捉えられがちであるが、教育という用語は広義の生涯教育の意味を含んでいることが補足された。
 - ④ 最初のフォーカスは、2006年問題に代表される学校教育の問題の議論におきたい。
 - ⑤ 学校科目「地学」関連学会連絡協議会との関連などが説明された。
 - ⑥ 意見として、設立の趣旨が文面に反映されていないのではないかなどといったものが出された。
- (3) 日本地学教育学会の合同大会への協賛を承認した。

6. その他

(1) 連絡会次期役員を承認した。

会長: 平原和朗(日本地震学会、新任)。

庶務渉外担当幹事: 鍵 裕之(日本地球化学会、留任)、新任の庶務幹事1名の選出は平原会長に一任。

会計幹事: 末永 弘(日本応用地質学会、留任)、津田敏隆(日本気象学会、新任)。

ニュースレター担当幹事: 諸井孝文(日本地震学会、新任)。

(2) 2004年5月合同大会終了以降の連絡会会長は、日本火山学会から選出することを確認した。

(3) 次回連絡会会合の日程

9月頃に行う予定。

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース 第28号

2003年7月22日発行

発行: 地球惑星科学関連学会連絡会

連絡会会長 平原和朗

編集: 地球惑星科学関連学会連絡会

連絡会幹事会ニュースレター担当 諸井孝文